

[原著論文]

比喩生成課題を用いたソーシャルワークイメージに関する予備的研究 －医療ソーシャルワーカーの若手とベテランに対するインタビュー調査より－

横山豊治¹⁾、保正友子²⁾

キーワード：比喩生成課題、ソーシャルワークイメージ、ソーシャルワーカー、専門的力量、医療ソーシャルワーク

The preliminary study of images of the Social Work by metaphor-making tasks － Based on the interview research to the entry level medical social workers and the expert medical social workers －

Toyoharu Yokoyama, M.S.W., C.S.W, Tomoko Hosho, M.S., C.S.W

Abstract

We tried to interview research to ten social workers in health services, as the preliminary study of the professional competence of Social Workers. The purpose of this research is to make a matter clear about social worker's self image and recognition of social work practice. We referred to expert study of teachers in Educational Psychology and applied to the metaphor-making tasks.

Five entry level social workers and five expert social workers were asked to make metaphors on 3 topics: "Social worker, Social Work and Client".

Results were as follows.

1. Their answers are very diverse and same item is a few.
2. The most same answers are client images compared to "Teachers", by four persons.

Then three persons among them are entry level Social workers.

Keyword : metaphor-making tasks, social work image, social worker, professional competence, medical social work,

要旨

ソーシャルワーカーの専門的力量の解明を多角的に進めていくための予備的研究として、現職のソーシャルワーカーは日々の実践や自己像をどのように認識しているのかを探るインタビュー調査を試みた。

研究方法としては、教育心理学の分野で行われている学校教師の熟達化研究を参考にし、比喩生成課題を若手とベテランの医療ソーシャルワーカー5人ずつの計10人に対して実施した。「ソーシャルワーカー」「ソーシャルワーク」「クライアント」の3つについて、比喩表現を求めた結果、

非常に多様な回答が得られ、同一表現はわずかであった。比較的目立ったのは、クライアントを教師に喩える回答であり、同類の比喩が10人中4人から得られたが、その4人のうちの3人が若手ワーカーであった。援助対象者から様々な人生を学び、ソーシャルワーカーとしての経験を豊かにしようとする若手ワーカーの姿勢が窺われた。

I はじめに

ソーシャルワーカーが実践経験を積み重ね、熟達化するに連れてどのようにその専門的力量が変化していくのか。

1) 新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科

2) 立正大学 社会福祉学部 社会福祉学科

横山豊治 新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科

[連絡先] 〒950-3198 新潟市島見町1398番地

TEL/FAX : 025-257-4470

E-mail : toyo-y@nuhw.ac.jp

筆者らはそこに関心を寄せ、若手とベテランのソーシャルワーカーを対象に同一事例への見解を聴取し、その内容を分析する調査研究などを進めているが、それと同時に「ソーシャルワーク」や「ソーシャルワーカー」というものに対して彼ら自身が抱くイメージが、経験年数の長短によって異なるのかどうかという点にも関心を向け、調査を試みた。ソーシャルワーカーの専門的力そのものを明らかにしていく研究を、より多角的に進めていく上で、日々の実践や自己像についてどのように認識しているのかをワーカー自身の独自の言語表現から探ることが、この職種の特徴や傾向の把握に役立つのではないかと考えたからである。

II 先行研究の概要

ソーシャルワークの分野において、こうした問題意識に関連する先行研究には、10年以上の経験年数を有する3人の精神保健福祉分野のソーシャルワーカー（PSW）に対して「自己規定」に関するインタビューを行った横山登志子の調査や、150人の医療ソーシャルワーカー（MSW）を対象とした質問紙の郵送調査によってアイディアイメージと実践的意識を比較検討した南彩子らの量的調査などがある。^{1) 2)}

そのうち横山は、3人のインタビュー結果から描き出されたソーシャルワーカー像として、「『問題を専門知識と技術によって解決・調整する専門家』として不動の立場性を有した専門家ではない」と述べ、一般的な専門家像とは異なる姿を提示している。また、その調査で同時に問うた「クライアント像」については、「他者に貢献できる貴重な体験を持つ人」や「サービス消費者」として認識する回答を得たとしている。³⁾

一方、南らは、「MSWの職務の特徴を表わしていると思われる概念」を「アイディアイメージ」と名づけ、グラウンデッド・セオリーによって仮説的に生成した33項目について、MSWたちの職務への認識を問うとともに、日常業務の中でそれをどの程度意識しているかについても回答を求め、その結果を「実践的意識」と名づけてアイディアイメージの結果と比較検討し、「理想と現実」に差があるのかを確かめようとしているが、この両者いずれについても、年齢や経験年数（5年未満と5年以上の比較）による差異は認められなかったとしている。⁴⁾

しかし、それらの先行研究はいずれも、経験年数の長短による差異の追究を動機や主目的として行われたものではなく、熟達化研究とは別の側面からソーシャルワーカーの専門性に迫ろうとしたものである。

そこで、今回、筆者らが参考にしたのは、教育心理学の分野で秋田喜代美によって学校教師を対象に行われた熟達化研究の手法である。

秋田は、授業や教えることに対するイメージが、教職経験に伴いどのように変容するかを明らかにすることを目的

として、教育実習未経験の大学生（教職課程、教職課程以外）219人と現職教員（高校新任教員、小・中・高校中堅教員）125人を対象に、「授業」「教師」「教えること」という3項目に対して、それぞれを「～のようだ。なぜなら…」と比喩で言語化することを求め、書面への筆記の回答を集団一斉実施で集めた。その結果、「学生-新任教員-中堅教員間という経験年数によって、また小学校課程と中学校課程間で授業に関して持っているイメージに違いがあることが示唆された」としている。授業を「伝達の間」ととらえる者が新任教師に多いのに対し、中堅教師は「共同作成の間」としてとらえる者が多かったのである。⁵⁾

こうした研究手法は、これまでソーシャルワーク研究の分野において用いられた例がないため、その応用の可能性を探るための試行的、予備的な研究として、今回、経験年数5年未満と、10年以上の医療ソーシャルワーカー5人ずつ、計10人に対してインタビュー形式で同様の問いかけをする調査を行ったので報告する。

III 研究目的

本研究の目的は次の2点である。

1. 現職のソーシャルワーカーが「ソーシャルワーク」「クライアント」に対してどのようなイメージを持っているのかを、比喩生成課題で問うた場合に、どのような言葉で表現されるのか、基礎的なデータを得る。
2. 1の結果をもとに、ソーシャルワーカーとしての経験年数の長短によって、比喩表現の仕方に明確な差異や特徴が見られるのかを検討する。

IV 研究方法

1. 調査対象

調査対象は、B県内の医療機関に勤務するソーシャルワーカーのうち、経験年数3年以上5年未満の者5人、及び同10年以上20年未満の者5人の計10人と設定した。（経験年数は医療ソーシャルワーカーとしての実践経験）

対象者の選定は、B県医療ソーシャルワーカー協会の協力を得て、同会の会長、事務局長に、上記の経験年数を満たし所属医療機関の種別や地域に偏りがなく、同協会の研修への受講歴があることを条件として会員の人選を依頼し、調査への内諾を得られた者に対して、あらかじめ筆者らが調査の趣旨を書面で説明して了承を得るという手順で行った。いわゆる「一人職場」であるか否か、先輩ワーカー、後輩ワーカーがいるかどうかなどは選定の段階では特に考慮しなかったが、調査の際に基礎資料として聴取した。

なお、今回の調査対象を保健医療分野のソーシャルワーカーとした理由は、次の3点による。第1に、保健医療分野のソーシャルワーカーは、日常的に「ソーシャルワー

カー」を標榜して働いており、ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティが他分野で働く者よりも明確であること。第2に、各県に医療ソーシャルワーカーの協会が組織されており、初任者研修などが定着して会員の経験年数の程度が把握されやすく、一定の調査条件に沿った対象者の人選や依頼が可能であること。第3に、筆者ら自身に医療ソーシャルワーカーとしての実践経験があり、他分野よりも調査対象者の立場や業務内容を理解しやすく、インタビュー結果の分析が的確に行えると考えたこと。

実際に調査対象となった10人の所属機関と経験年数の内訳は、表1のとおりである。所属機関については、経営主体、病床数、医療ソーシャルワーカーの人数を示した。

表1 調査対象者

若手ソーシャルワーカー				ベテランソーシャルワーカー					
	経営主体	病床数	MSW数	経験年数		経営主体	病床数	MSW数	経験年数
A	町立	105	1人	4.5年目	F	市立	598	3人	19年目
B	市立	654	2人	4年目	G	県立	577	4人	16年目
C	医療法人	144	2人	4年目	H	市立	550	3人	19年目
D	市立	451	2人	4年目	I	市立	601	3人	17年目
E	市立	500	2人	4年目	J	日赤	354	3人	12年目

2. 調査方法

1) 調査期間と手順

2006年8月15日～22日の調査期間に、横山、保正の2名で上記の10人が勤務する医療機関を順次訪問し、調査者2名対被調査者1名でのインタビューを実施した。

インタビューの手順としては、最初にまず10分程度、病院の概要やMSW業務の概要、本人の取得資格や経験年数などのプロフィールを聴取した。

そして本調査については、「ソーシャルワークに関する意識調査」と告げて、質問項目を列記したプリント1枚を相手に供覧しながら、「それぞれについてあなたが持っているイメージと、それを何かに喩えて表現するとどうなるか、そしてそう思う理由を聞かせていただきたい」と依頼した。質問への回答に特に時間制限は設けず、相手から全部の項目に対する回答（「わかりません」を含む）が出るまで待つようにした。この部分に要した時間は概ね、10分間程度であった。終了後にプリントは回収し、内容は調査全体が終了する8月末までは他言しないよう要請した。インタビューは許可を得て録音するとともに、調査者が手でメモを取って記録した。また、調査結果の公表にあたっては、所属名・氏名ともに匿名化することを説明し、了承を得た。

2) 質問項目

被調査者に提示した質問項目は表2のとおりである。

表2 質問用紙に示した項目

①	ソーシャルワーカーについて
	・ 自分にとってソーシャルワーカーとはどのような人か
	・ 「ソーシャルワーカーとは～のようだ。なぜなら～」
②	ソーシャルワークについて
	・ 自分にとってソーシャルワークとはなにか
	・ 「ソーシャルワークとは～のようだ。なぜなら～」
③	クライアントについて
	・ 自分にとってクライアントとはどのような人か
	・ 「クライアントとは～のようだ。なぜなら～」

V 研究結果

1. 比喩生成課題の結果

インタビュー調査によって得られたデータを「若手」と「ベテラン」とに分けて一覧できるようにしたものが、表3である。

わずか10人分のデータから数量的な傾向を読み取ることは当然限界があるが、ここに示された事実としては次のようなことがいえる。

1) 全般的に回答が多様で、同一の表現はごくわずかしかなかった。

まったく同一の表現としては、「ソーシャルワーカー」を「伴走者」とした回答が若手とベテランに1人ずつあり、言及の仕方に若干の違いはあるが意味的に同じものを指している回答として「クライアント」に対する「先生・教師・いろいろなことを教えてくれる人たち」という表現が4人に見られた。その4人のうち3人が若手の回答に見られた点で、この中ではやや目立つものの、全体として若手とベテランとの間での顕著な差異は浮き彫りにならなかった。

2) ワーカー・クライアントの比喩に人的なものとならないものが多かった。

「ソーシャルワーカー」について、若手では3人（野球・サッカーの監督、完璧でない人間、伴走者）が、ベテランでも3人（伴走者、家族、縁の下の力持ち）が、人的なものに喩えていた一方で、「風」「空中の空気・光・風」など固体でないものや自然現象に喩えた回答が若手、ベテランに1人ずつおり、若手で「テレビ番組」と答えた者が1人いた。

「クライアント」についても、若手で3人（先生、教師）が、ベテランでも3人（いろいろなことを教えてくれる人たち、お客さん、力をくれる人）が、人的なものに喩えていた一方で、それ以外の表現を用いた者が若手で2人（天候・季節、鏡）ベテランで1人（水）いた。

3) 「ソーシャルワーク」については、全員の回答が異なっていた。

「わからない」と答えた者以外の9人の回答はすべて異なり、物的・具象的な表現に留まらず人の集合（オーケストラ）や結びつき（結婚）を指す表現や、ある種の概念（長い目標）を指す表現などがあり、実に多彩であった。

表3 比喩生成課題への回答

略号：SWer = ソーシャルワーカー SW = ソーシャルワーク Ct = クライアント

1. 若手ソーシャルワーカー

	ソーシャルワーカーについて		ソーシャルワークについて		クライアントについて	
	自分にとってSWerとはどのような人か	SWerとは~のようだ。なぜなら~	自分にとってSWとは何か	SWとは~のようだ。なぜなら~	自分にとってCtとはどのような人か	Ctとは~のようだ。なぜなら~
A	病院にとって必要な人。看護師よりもゆっくり関わっていく感じ。	野球やサッカーの監督 みたい。動くのは選手。患者・家族がうまく動けるように環境を整え、自分で動けるように関わっていくから。	奥が深くて広い。常に勉強が必要。	オーケストラ みたい。様々な楽器があるように、多様な制度があり、同じ曲でも指揮者によって全然違う印象になるように、ケースも病気や家族状況によって違うから。	いろいろ気づかせてくれる人。失敗・間違いを気づかせてくれる先生。	先生 のようだ。そのCtに会ったことで、自分でわからないことを調べようとするから。
B	問題解決のお手伝いをする。社会資源を変革していくのが大きな役割。人と人、人と制度をつなぐ、Ctとつかず離れずの立場。	風 のようなもの。近くに見えたり遠くに離れたり。	SWがわかった時には、もっと自信を持って仕事ができるだろう。患者さんの不安や負の部分を取り除き、気持ちと和らげたりできるのがSW。	結婚 のよう。自分の目標であり、自分を磨いていく機会であり、勉強も必要だから。結婚してからも様々なことがあると思うが、自分で考え、人とも関わりながら乗り越えていくところがSWに近い。	その時によって変わるが、家族のように思えたり、他人にもなる。Ctがいなくて自分も存在しないと思う。	天候、季節 のようなもの。想像や予想はできるが、実際はその場になってみないとわからず、天候によって災害が起こった時に最善の対応をどう行うかが、少し似ているから。
C	人間。Ctと同様、SWerも皆育ってきた環境が違うので、人それぞれ。	完璧でない人間 。自分で完璧と思っても、相手はそう思っていないかも知れないから。	難しい、のひと言。教科書通りでなく、五感を使って自分で相手の気持ちを感じる仕事。	教科書 。それをすることで考えさせられ、教えられるから。様々な人がいて、教えられるから。	いろいろ。情報提供。	先生。一筋縄では いかない先生。同じような依頼でも皆異なり、様々な人たちから教わっているから。
D	相談者に選択肢を提示する人。	テレビ番組 。情報を皆に渡すという意味で。	情報。時に手助けをしてくれるもの。	文房具 。自分の前には当たり前のようにあるが、多様な使い方がある道具だから。	一緒に考える人。	教師 。教えてくれる人。自分が考えつかないことを教えてもらうことがあるから。
E	病気ではなく、Ctそのものや生活を見る人。	伴走者 のような人。友達でもないが、決して先を行く人でもないし、上から物を言う者でもない。Ctの問題を見つけるお手伝いや解決のお手伝いはするが、結局、その人の力で走ってもらうために関わるから。	好きなもの。それしか自分にはできないと思う。まだ答えは出ていない。	スルメ のようなもの。噛めば噛むほど味が出るから。わかかっていくほど面白い。	一人の特別な人だが、抱えている問題は誰にでも起こり得るもの。	鏡 のような人。自分の関わり方によって全然違う反応が返り、関わり方を如実に表わしているから。

2. ベテランソーシャルワーカー

	ソーシャルワーカーについて		ソーシャルワークについて		クライアントについて	
	自分にとってSWerとはどのような人か	SWerとは~のようだ。なぜなら~	自分にとってSWとは何か	SWとは~のようだ。なぜなら~	自分にとってCtとはどのような人か	Ctとは~のようだ。なぜなら~
F	SWを行う人。闘う人。Ctを社会的差別、壁から守る。社会に適応できるようにする人。時には自分の価値観、迷いを自分に問いながらCtや組織とも闘う。	わからない。(若い頃はかっこいいことが言えたが、今は深さや難しさがわかり、言えなくなっている)	私の業務。仕事。その人の生きる力を高めるための援助業務、プロセス。	わからない。	疾病によって生じる生活上の課題を抱えている人。SWerが相談する相手。	水 みたいなもの。人それぞれ違い、氷、雲など様々な物質に形を変えるように、様々な人を見て感じたから。
G	共に話しながら全体図(マップ)の中で、今この場所にいるということはある程度明らかにしていく人。	伴走者 。視覚障害者のマラソンなどで伴走している人。Ctの少し前を伴走するが、前途の障害物を除去して転ばないようにするのではなく、一緒に転んで立ち上がる術を習得できるように、できることを見守っている存在。	生きることを考えさせてくれるもの。普段、お金、法律、人との関わりなどを意識しなくとも自然にやっているが、生きていくためにそれが必要なのだと気づかせてくれるもの。	聖書 のよう。含蓄のあるもの。普段は読まない分厚い本でも、何かの時に開けてみると重要なことが書いてある。「そういうこともあるよね」と生きることの一つ一つを意識化させてくれるから。	師匠。自分が体験していない人生を教えてくれる人。その人を通じて知らなかった職業や生き方を疑似体験できる。	良いことも悪いことも いろいろ教えてくれる人たち 。素敵なお夫婦に会うと自分も家庭を築くことに憧れるが、骨肉の争いを見ると「そうならないためにはどうすればいいか」と考えさせられたりするから。
H	一緒に考え、悩んでくれる人。様々な情報を持つが、それを活用しながら生活の立て方を一緒に考えていくような人。	家族 。一緒に考えたり、励ましたり、論じたり、悩んだりするから。	マニュアルのない仕事。コンピュータや事務的作業と違い、機械的にマニュアル通りにいかないが、SWerの個性が大事。	マニュアルのない仕事 。	サービスを提供し、満足していただくようにするお客さん。病院というホテルに泊まりにくる人達それぞれに合った対応を心がけているから。	お客さん 。ホテルを利用するお客さんと似ているが、違うのは、マニュアル的でなく一人一人に合った対応をするところ。
I	話をじっくり聴ける人。既成概念にとらわれないことが大事。	自然の中の 空気、光、風 。絶対なくてはならないというものでもなさそうだが、あったら心地よく感じるような存在感。	すごく広いもの。何でも含まれるような気がする。	日常生活上の対人関係の中で生まれてきているもの 。広く考えれば「これもSWでは」ということもあるから。	誰でもなり得るもの。体は問題なくともある面ではCtになることもあり得るから。	誰もがる可能性 があるもの。日常生活の中での不調や困っていることなど。
J	様々な材料を集めたり気持ちを整理したりする存在。Ctの決定を支援していく。	縁の下の力持ち のよう。前面に出ず、横にいるというイメージだから。	好きな仕事だが、まだ自分でちゃんとできているとは思えない目標。	長い目標 のよう。Ctのことがよく理解でき、話が聴けるようになるために。	力をくれる人。Ctにとって良い方法を共に考えて導き出すから。	力をくれる人 。自分の方が元気づけられ、育ててもらっているから。

物的・具象的な表現も、「教科書」「聖書」「文房具」「スルメ」と、性質の異なるものが挙げられた。

4) 完全に比喩化されない説明的な回答が数例見られた。

「完璧でない人間」「縁の下の力持ち」「マニュアルのない仕事」「日常生活上の対人関係で生まれてきているもの」「いろいろ教えてくれる人たち」「誰もがなる可能性のあるもの」「力をくれる人」といった表現は、課題に対してそれぞれの特徴や性質を説明しているが、厳密な意味での比喩とは、そういう特徴や性質を持つ別の具体的な事物に置き換える作業であるため、課題の遂行という点では不十分な回答といえる。

3. 比喩表現の意味

比喩生成課題の結果からソーシャルワーク実践の特徴や性質がどのように読み取れるかについて、紙数の都合上、本稿では全回答に対する解釈を詳述することができないため、「ソーシャルワーカー」と「クライアント」の比喩表現のいくつかについて、それぞれの「理由」の部分もふまえて述べることにする。

1) 「ソーシャルワーカー」の比喩が意味するもの

①「野球・サッカーの監督」

監督といえば、一般的には指導者や指揮官という役割を担うイメージだが、ここでは患者・家族が問題解決の主体であり、彼らをスポーツの主人公である選手たちになぞらえ、主体的に動けるような環境調整などをする立場にワーカーの役割を見出している。

②「風」

クライアントの状況に応じて、インテンシブな関わりが必要なときは接近したり、問題解決能力が十分発揮されて自立していくときは距離を置いたりし、援助関係が終了すれば離れる—というように、関与の仕方が固定的ではなく、変化の可能性に富んでいることを表わしている。

③「伴走者」

ワーカー・クライアント関係は、主従関係や上下関係ではないため、先導するのではなく「並んで共に走る人」という関係性を表わそうとしている。手を貸すのではなく、共に居るといった存在感が、福祉的問題を抱えた人への精神的な支えになり、自立に寄与するという援助観が表われている。

2) 「クライアント」の比喩が意味するもの

①「先生・教師」

一般的な専門家のイメージとしては、素人が知らない専門的知識・技術を駆使し、利用者側の方が「教わる」という立場として受け止められやすいが、ワーカーの場合は、多様な人生経験者の生活歴や家族歴などを聴取し、パーソナリティの個別性や自己決定にも注意を払う職種であるため、常に新しい人生や価値観に出会うというスタンスでクライアントと対面している。その相手によって、自分の知

的な生活経験の幅を広げ、援助者としての実践経験を豊かにさせてもらっているという意識が、クライアントから学ぶ立場を強調させていると考えられる。そうした回答が、若手では5人中3人から挙がったのに対して、ベテランでは5人中1人からしか挙がらなかったため、若手の方に「人生の先輩たちから教わる」という意識が比較的強い可能性のあることが推察される。

②「水」

流れる液体としての性質に着目したのではなく、凍れば硬い氷となり、溶ければ液体に、熱せられれば水蒸気になり、空では雲にもなる—という具合に、人は固定的、定常的なものではなく、変化し得るものだという柔軟な人間観が、多様なクライアントとの出会いやソーシャルワーク実践を通して涵養されたことが窺われる。

VI 考察

比喩生成課題について、わずか10人から得た回答だけでも、その言語表現は非常に多岐に渡ることがわかった。教師研究の分野において秋田が行った質問紙形式の量的調査の結果では、「教師」の役割を表わす比喩の中で、人や動植物を育てる「育て手」や、役者・芸人・アナウンサーなどの「伝達者・話し手」というようなカテゴリーに分類される回答が特に多く見受けられたが、本調査の回答に見る「ソーシャルワーカー」の役割からは、「育てる」や「伝える・話す」という機能をダイレクトに象徴するような比喩表現はむしろ非常に少なく、若手の「テレビ番組」1件のみであった。2人が挙げていた「伴走者」も、結果的に相手の目標達成や成長に寄与し得るという意味で、「育てる」側面が多少含まれるが、それよりも「共感的理解者として並走し、問題解決への努力のプロセスを共有する者」として存在しようという意味合いが強い表現といえる。また、秋田の調査ではそれらに続いて「導く者」というカテゴリーも多く、その範疇に「監督」という回答があったが、本調査では若手に「野球・サッカーの監督」が1件見られたのみであった。「育てる」という側面について言えば、むしろ援助の対象者である「クライアント」のことを指して、教育者の立場に喩える回答が10人中4人から寄せられた点の特徴として挙げられる。

今回の調査方法は、調査者が直接対面するインタビュー形式で行ったが、ほとんどの対象者が質問に対して即答はされず、「難しいですねえ…」としばし考えあぐねた末に言葉を捻り出したという印象が強い。イメージを想起させ、それに近い別の事物に置き換えて表現させようとすると、相手の語彙力や表現力、いわば“言葉のセンス”が問われることになるため、対面的な調査よりも質問紙に筆記させて事務的に回収するという間接的な方法を取る方が、言葉を選びやすく余分な緊張感を与えずに柔軟な回答が得られた可能性もあると考えられる。今後は、そうした調査方法

にも検討を加え、研究を発展させていきたい。

付記

本研究は、独立行政法人日本学術振興会平成18年度科学研究費補助金「基盤研究(C)」(研究代表者:保正友子、共同研究者:横山豊治・鈴木真理子)を受けて行った「ベテランと若手の比較に基づくソーシャルワーカーの専門的力量解明にむけた実証的研究」の一部である。

謝辞

本調査にご協力いただいたB県医療ソーシャルワーカー協会の皆様に深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 横山登志子. 精神保健福祉領域の「現場」で生成するソーシャルワーカーの援助観—ソーシャルワーカーの自己規定に着目して—. 社会福祉学 72: 24-34, 2004.
- 2) 南彩子, 武田加代子. 医療ソーシャルワーカーの職務の特徴—アイデアルイメージと実践的意識の比較—. 社会福祉学 62: 111-120, 2000.
- 3) 横山登志子. 前掲書 1). 29-30.
- 4) 南彩子ら. 前掲書 2). 117-119.
- 5) 秋田喜代美. 教える経験に伴う授業イメージの変容—比喩生成課題による検討—. 教育心理学研究 44 (2), 176-186, 1996.